

今日からはセンターモードで！ 21日・22日センター演習会です。

不動岡で最後の定期考査も今日で終了です。今日からは受験勉強に専念です。センター試験まで、あと一か月に迫ってきました。国公立 or 私立を問わず、二次試験のウエイトが高い大学を志望する人も、センター試験を甘く見てはいけません。難関大と呼ばれる大学は二次配点が高いところが多いです。東工大はセンター得点率64%あれば二次勝負です。しかし、得点率70%を切った合格者はごくわずかです。二次で高得点を取るにはそれぞれの科目の基礎・基盤ができていないかが重要です。その基礎・基盤の完成度がセンターの成績に現れます。大学受験は「一次が万事」とも言われます。まずは最初の関門であるセンター試験で目標点をクリアすることに全力を傾けましょう。

さて、この時期に何をやるべきか？入試直前期は、今までに使ってきた参考書・問題集・ノートなどを使って、これまで勉強してきたことの総復習に重点を置くことが鉄則です。過去に受けた模試の見直しも効果絶大です。また、赤本等を使った過去問演習によって応用力とスピードをつけ、その中から自分の弱点を発見したらそこを重点的に補強するといった学習法も有効です。過去問を解くことで出題形式に慣れることもできます。いずれにしても、ここまで来たら徒に新しい参考書・問題集を開くのではなく、使い慣れた本の完全習得にこそ力を注ぎましょう！！

それから、志望大学のボーダー得点を調べ、自分の科目別の目標得点を明確に決めましょう。21日（土）、22日（日）に行われるセンター演習会は、本番の実施時間に沿って演習を行います。思いのほか長い休み時間をどうリラックスして過ごし、次の科目に向けて集中力を高めるかを実際に体験します。センター演習会では、受験をしながら科目別目標得点と自分の目算との差をチェックしながら、得点を積み上げてみましょう。言うまでもなく、センターで大切なのは総合得点です。科目別目標得点との差がプラスなら、より落ち着いて実力が発揮できることでしょう。しかし、マイナスになってしまった時、あわてずに残りの受験科目の中からどの科目で何点上乗せできるかを考えながら2日間を乗り切る練習にもなります。必要だからこの時期にセンター演習会をやるのです。本番のつもりで、目標点を設定し、緊張感をもって臨んでください。

今日からセンター試験までのスケジュールを考えてみましょう！

河合塾・第3回全統マーク模試にみる2020年度入試の動向 ①

132回生も多くが受験した第3回全統マーク模試からみる志望動向を中心に、河合塾による情報分析が報告されました。

【国立大学編】

●北海道大学

大学全体の志望者数は、前期日程4,767人（前年比96%）、後期日程2,905人（同97%）と両日程で減少した。北海道内志望者数は、前期日程2,249人（前年比90%）、後期日程697人（同91%）といずれも大幅に減少し、志望者全体の減少率を上回った。前期日程の動向を学部別にみると、文系学部の志望者数は前年並みとなった。しかし、成績上位層は増加しており、経済学部を除くすべての学部でボーダー得点率は2019年度入試から1~4%アップを予想している。なかでも、文・人文科学では、2019年度入試で難化した反動からか今模試の志望者は前年比86%と大きく減少したが、成績上位層は増加しており、ボーダー得点率・2次ランクともに難化を見込んでいる。理系学部では、志望

者数は前年比95%と減少しており、2019年度入試同様に敬遠されている様子がかかえる。ただし、志望者の減少はボーダー以下の層が中心となっており、易化は期待できそうにない。予想ボーダー得点率は、募集区分により変動はあるが、概ね2019年度入試並みを見込んでいる。

●東北大学

大学全体の志望者数は前期日程で4,732人（前年比102%）、後期日程で766人（同102%）といずれも前年並みとなった。学部別の動向をみると、文学部では、2019年度入試の反動からか志望者が前年比120%と大幅に増加した。経済学部では2020年度入試から理系入試を導入する。従来からの入試は文系入試に名称変更し、一般入試（前・後期）、AO入試とも文系・理系の2区分での募集となる。学部全体の入学定員260名は変わらないものの、理系入試の導入により文系入試（前期）では募集人員が30名減となる。今模試では、前期日程の志望者数は文系入試では前年比106%と増加、理系入試では募集人員10名に対し34人の志望者が集まった。いずれの入試もボーダー得点率81%、2次ランクは3ランク（偏差値60.0）を予想している。後期日程の志望者数は、文系入試が207人（前年比80%）と大きく減少、理系入試では募集人員10名に対し47人の志望者が集まった。

●筑波大学

大学全体の志望者は、前期日程5,623人（前年比100%）と前年並みだが、後期日程は978人（前年比90%）と減少した。前期日程では、人文・文化学群で志望者が539人（前年比107%）と増加した。人文、比較文化の両学群では、成績上位者層も厚くボーダー得点率もそれぞれアップを予想している。理工学群では志望者が前年比101%となった。社会工学類では、前回の模試に引き続き志望者が増加しており、理工学群の中でボーダー得点率がトップとなった。生命環境学群では志望者は前年比98%と減少しており、とくに生物資源学類では同86%と減少が目立った。ボーダー得点率も3%ダウンの79%を予想している。医学群では、学群全体で志望者は前年比98%やや減少となったが、医学類では地域枠を除き同102%とやや増加した。医学類では2020年度入試より募集人員を58名から49名に変更する。第一段階選抜は2.5倍のままのため、注意が必要である。生命環境学群では志望者前年比98%と減少した。人気系統の情報学群では634人（前年比105%）と志望者を集めている。後期日程では、芸術専門学群を除く学群で軒並み減少しており、前期筑波―後期筑波の併願も少なくなっている。

●千葉大学

大学全体の志望者は、前期日程4,886人（前年比93%）、後期日程1,903人（同96%）と両日程で減少した。前期日程の動向を学部別に見ると、文系学部では、文学部の志望者が前年比101%と安定した人気を示した一方、その他の学部では減少した。2019年度入試で志願者が大幅に減少した国際教養学部―国際教養（通常型）では、今模試でも志望者は前年比85%と減少した。また、教育学部では、学部全体の志望者は前年の648人から490人（前年比76%）と減少した。ほとんどのコース・分野で2次試験の科目負担が増えるため、敬遠されているようだ。小学校コース、中学・国語科教育分野などでは、志望者減にともない易化を見込んでいる。理系学部では、理学部の志望者は前年比98%、工学部も同97%と概ね前年並みとなった。医学科では、地域枠の新設にともない一般枠の募集人員が減少する。今模試では前年並みの志望者が集まっているが、今後の動向には注意したい。後期日程では、理系学部の志望者が増加するなか、工学部では減少した。ただし、工・情報工学では、志望者・成績上位者とも増加しており、ボーダー得点率は前年から4%アップと難化を予想している。

●東京都立大学

大学全体の志望者は、前期日程6,232人（前年比107%）、後期日程1,946人（同107%）といずれも増加した。2020年度より大学名称が首都大東京から東京都立大に変更されるが、今年のことまでの模試ではいずれの回も志望者数が

前年を上回っており、名称変更が人気につながっていると見えそうである。現浪別にみると、現役生の志望者が前期日程 5,353 人（前年比 110%）、後期日程 1,614 人（同 109%）と、志望者の増加をけん引した様子がうかがえる。また、ボーダーラインより上の上位層が前期 657 人（前年比 129%）、後期 394 人（同 127%）と大幅に増加しており、このまま推移すれば厳しい入試が予想される。前期日程の志望者を学部・学科別にみると、理学部では化学科 87 人（前年比 158%）、生命科学科 89 人（同 135%）で、健康福祉学部では作業療法学科 82 人（同 141%）、放射線学科 244 人（同 134%）などで増加が目立った。一方、全体的に志望者が増加した学科が多いなか減少が顕著なのは、システムデザイン学部航空宇宙システム工学科 165 人（前年比 78%）、理学部数理科学科 61 人（同 86%）、都市環境学部建築学科 386 人（同 87%）である。模試時に人気の大学が本番入試では敬遠された例も見られるものの、センター試験後の直前動向には注意を払いたい。また、職業と直結する医療系については、志望者には教科・科目数や難易度だけでなく、志望動機も含め考えさせたい。

●東京大学

大学全体の志望者数は 5,903 人（前年比 100%）と前年並みとなった。2019 年度入試では私立大入試の難関大敬遠傾向と同様に、難関国立でも志願者が減少した大学が目立った。東京大の 2019 年度入試の志願者も前年からやや減少したが、今模試においては、志望者は落ちついた印象が感じられる。文科類では文科一類で前年比 104%、文科三類で同 103%と志望者は前年を上回っているが、文科二類では同 92%と減少した。系統不人気に加え 2019 年度入試で文科二類合格者の最低点・平均点ともに文科一類を上回ったことが、文科二類敬遠の一因と推測する。理科類は、理科一類で志望者前年比 100%、理科二類で同 102%と概ね前年並みとなった。理科一類については、第 1 回・第 2 回全統マーク模試両回とも志望者は減少しており、今後の動向が注目される。理科三類では志望者前年比 95%と減少した。医学科の志望者は全国的に減少傾向にある。理科三類では 2019 年度入試まで 3 年連続の志願者減となっていることもあり、第 1 回・第 2 回の全統マーク模試での志望者は前年を上回っていたが、ここにきて安全志向が強まっている可能性がある。

●東京工業大学

前期日程の志望者は、1,808 人（前年比 80%）と大きく減少している。学院別でみると、生命理工学院を除く学院で志望者が 1 割以上減少した。なかでも、工学院（前年比 77%）、物質理工学院（同 73%）、環境・社会理工学院（同 74%）などで志望者の減少が目立った。2019 年度入試で実質倍率が最も高かった情報理工学院でも志望者は前年比 83%と減少した。情報系の学部は全国的に志望者が増加している傾向にあるが、東京工業大については異なる動向となった。唯一志望者が増加した生命理工学院は前年比 108%となった。生命理工学院のみの後期日程は、志望者前年比 96%とやや減少した。前期・後期ともにボーダー得点率は 2019 年度入試からの変化はないと見込んでいる。

●一橋大学

大学全体の前期日程の志望者数は 1,673 人（前年比 74%）と大幅に減少した。2019 年度入試においても大学全体の前期の志願者は前年から約 1 割の大幅減となったが、今模試でも引き続き受験生から警戒された様子がうかがえる。学部別にみても、前期日程では社会（前年比 72%）、法（同 76%）、経済（同 71%）、商（同 76%）と全学部で志望者が 2 割以上減少した。今模試において、これらの学部系統は全国的にも志望者減の傾向にあるが、一橋大についてはとくに減少が目立った。経済学部でのみ実施される後期でも、志望者数は 684 人（前年比 90%）と減少した。前期日程同様、2019 年度入試では志願者が減少しており、今模試でも低調な人気である。

●横浜国立大学

大学全体の志望者数は、前期日程 4,003 人（前年比 95%）、後期日程 1,944 人（同 88%）と両日程とも減少した。学部別に動向をみると、前期日程では、教育学部、理工学部で志望者増となった一方、その他の学部では減少した。なかでも、経済学部（前年比 91%）、経営学部（同 86%）では、高い減少率となった。ただし、経営学部では成績上位

層に変化はみられず、ボーダー得点率は 84%と 2019 年度入試並みと予想している。理工学部では、学部全体の志望者は前年比 103%と増加した。数物・電子情報系学科一情報工学では、前年から 2 割以上増加した。入試予想難易度は、ボーダー得点率：79%、2 次ランク：3 ランク（偏差値帯 60.0）と、ハイレベルな入試を見込んでいる。後期日程では、前期日程同様に経営学部で志望者が大幅に減少し、高い減少率となった。